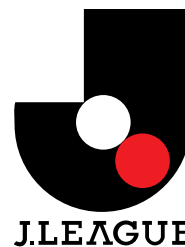


J.LEAGUE NEWS

Official News Letter
vol. 110
24.Dec.2004



編集・発行
社団法人日本プロサッカーリーグ
ホームページ <http://www.j-league.or.jp>

Amazing J.

スポーツで、もっと、幸せな国へ。 Jリーグ百年構想



© J.LEAGUE PHOTOS



2004サントリーチャンピオンシップ

J.LEAGUE

横浜 F・マリノスが制す

横浜 F・マリノス(1stステージ優勝)と浦和レッズ(2ndステージ優勝)の顔合わせによる2004サントリーチャンピオンシップは、PK戦にもつれ込む接戦の末、横浜FMが勝利を収め、年間チャンピオンの座に就いた。

12月5日の第1戦は横浜FMが河合竜二、同11日の第2戦は浦和が三都主アレサンドロの得点により、それぞれホームチームが1-0の勝利。第2戦の延長戦後に行われたPK戦を、横浜FMがGK榎本達也の好セーブにより4-2と制した。横浜FMは、1995年、2003年に続き、2年連続3度目の年間優勝となった。優勝回数は、ジュビロ磐田と並び、鹿島アントラーズの4回に次ぐもの。また、2004サントリーチャンピオンシップの最優秀選手には横浜FMのDF中澤佑二が選ばれた。

CONTENTS

横浜 F・マリノスが制す 2004サントリーチャンピオンシップ……………1
攻守にずば抜けた浦和レッズ J1 2ndステージ……………3
圧倒的な強さを見せた川崎フロンターレ/柏レイソルがJ1残留決める/徳島ヴォルティスとザスパ草津が新加入……………4
最優秀選手は中澤佑二 2004Jリーグアウォーズ……………6

TOPICS アルビレックス新潟が「がんばろう!新潟」ロゴマーク掲出/2005年シーズン リーグカップ公式戦試合球変更/「障害者サッカークリニック」を後援/入れ替え戦でインターネット中継を実施/2004Jユースカップ決勝トーナメント……………9
今年のAmazingそして来シーズンへの期待 記者座談会……………10
2004年Jリーグ チェアマン総括……………12

J.League Official Sponsors

Calbee

Canon

SUNTORY

JOMO

NicoS

LAWSON

KONAMI

Network Partner

NTT 東日本 / NTT 西日本

League Cup Sponsor

ヤマザキナビスコ

Jリーグ百年構想
パートナー
朝日新聞

PK戦で浦和レッズを下す

来季、J1(Jリーグ ディビジョン1)は1シーズン制に移行する。そのため、両ステージの優勝チームによる年間王者決定戦は、今回が最後。横浜 F・マリノスと浦和レッズによる2004サントリーチャンピオンシップは、そのフィナーレを飾るにふさわしい熱戦だった。

12月5日の第1戦は、ホームの横浜FMが1-0で先勝した。66分に河合竜二がヘディングで決めた1点を、激しく粘り強い守備で守りきった。6日後の第2戦は、76分に三都主アレサンドロがFKを巧みに決め、浦和が1-0と雪辱。2試合合計スコアが1-1となったが、延長戦でも均衡は破れず決着はPK戦に。そして、GK榎本達也が2本をストップした横浜FMが栄冠を獲得した。



© J.LEAGUE PHOTOS

見事なセーブを見せた横浜 FMの榎本達也

■ J1年間順位

順位	チーム	勝点	勝	分	敗	得点	失点	得失差
1	横浜 F・マリノス	59	17	8	5	47	30	17
2	浦和レッズ	62	19	5	6	70	39	31
3	ガンバ大阪	51	15	6	9	69	48	21
4	ジェフユナイテッド市原	50	13	11	6	55	45	10
5	ジュビロ磐田	48	14	6	10	54	44	10
6	鹿島アントラーズ	48	14	6	10	41	31	10
7	名古屋グランパスエイト	44	12	8	10	49	43	6
8	FC東京	41	10	11	9	40	41	-1
9	東京ヴェルディ1969	39	11	6	13	43	46	-3
10	アルビレックス新潟	37	10	7	13	47	58	-11
11	ヴィッセル神戸	36	9	9	12	50	55	-5
12	サンフレッチェ広島	31	6	13	11	36	42	-6
13	大分トリニータ	30	8	6	16	35	56	-21
14	清水エスパルス	29	7	8	15	37	53	-16
15	セレッソ大阪	26	6	8	16	42	64	-22
16	柏レイソル	25	5	10	15	29	49	-20

岡田武史監督(横浜 FM)の話

サントリーチャンピオンシップを2試合戦ってみて、改めて浦和は素晴らしいチームだと感じた。こういうチームを作ったギド・ブッフバルト監督に敬意を表したい。また、そういうチームを相手にして、アウェイでもあきらめずに戦ったわれわれの選手を誇りに思う。指導者として、幸せに感じた。

PK戦に持ち込んだ時には、PKの練習はしてきたのでいけるかなとは思った。苦しい中で優勝を勝ち取った選手たちに感謝したい。

シーズン終盤は、2トップの久保竜彦、安貞桓をはじめ、負傷者の続出に悩まされた横浜FMだが、「(サントリーチャンピオンシップの)3試合前から照準を合わせていた」(岡田武

史監督)という準備が実った。サントリーチャンピオンシップのMVPに輝いた中澤佑二は「積み重ねがものを言った」と、チームが蓄えてきた力をタイトル獲得の要因にあげた。

一方、浦和は11月の2004Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝に続き、またもPK戦によって惜敗した。三都主は「最後は経験の差が出たと思う」と語ったが、最後まで攻撃姿勢を貫きスタンドをわかせた。

過去2年はジュビロ磐田、横浜FMが両ステージ制覇による年間優勝を成し遂げたため、サントリーチャンピオンシップは3年ぶりの開催。横浜国際総合競技場で行われた第1戦には、6万4899人のファン・サポーターを集め、Jリーグ公式戦の最多入場者記録を更新した

(それまでの記録は、やはり横浜国際総合競技場で行われた1998年の'98JリーグKodakオールスターサッカーの6万566人)。

また、埼玉スタジアム2002に

ブッフバルト監督(浦和)の話

キックオフ直後から気迫あふれるプレーができた。後半も攻め続けることができたが、得点にならなかった。延長戦でも浦和が優位だったが、疲れが出てきて2点目を入れることができなかった。しかし圧倒的にうちのチームが優位だった。今年、決勝戦でPK戦で負けるのは2度目で苦い思い出になってしまった。優勝した横浜FMにはおめでとうと言いたい。



2004サントリーチャンピオンシップ

© J.LEAGUE PHOTOS

鈴木昌チェアマンの話

試合の内容は両チームとも見応えのある素晴らしいものであった。なんといってもサポーターの勢いがすごかった。

延長・PK戦となりレッズが勝った場合には、12番目の選手としてサポーターがMVPでもよいのではないかと思うほどだった。横浜FMの守備は素晴らしい。岡田監督の手腕をたたえたい。

浦和は伸びしろのあるチームであろう。今日のような戦い方を見たらレッズのサポーターは必ずついてきてくれる。

最後のサントリーチャンピオンシップとなったが、素晴らしい試合、サポーターの勢いを見ると、とても名残惜しい。

おける第2戦にも5万9715人が詰めかけ、2試合合計は12万4614人。これも、1993年の10万6563人を大幅に上回る最多記録となった。

なお、横浜FMはこの優勝により、今年度の天皇杯全日本サッカー選手権大会の優勝チームと対戦する2005ゼロックススーパーカップ、東アジア地域のクラブチャンピオンによるA3チャンピオンズカップ、そしてアジアのクラブチャンピオンを決めるAFCアジアチャンピオンズリーグにジュビロ磐田(昨年度の天皇杯優勝)とともに出場する権利を手にした。



© J.LEAGUE PHOTOS

MVPに選ばれた横浜FMの中澤佑二

攻守にずば抜けた浦和レッズ

J1 2ndステージ

2004 Jリーグ ディビジョン1(J1)2ndステージは浦和レッズが独走で初のタイトルを手にした。

浦和の強さはずば抜けていた。攻撃陣ではエメルソン、田中達也の2トップに加え、永井雄一郎や岡野雅行が絡んで、多彩な攻めを見せてリーグ1の40得点をマークした。特に、得点王になったエメルソンは一段と成長し、1stステージからの通算では27得点と、これまでのJリーグ最多得点を記録した。また守備陣も田中マルクス闘莉王を中心にネネ、アルバイが巧みに連携し、2ndステージの総失点は15とリーグ最

少だった。攻撃陣が点を取り、守備陣が失点を防ぐのだから浦和の強いのは当然だろう。これに途中故障した山瀬功治、長谷部誠、鈴木啓太ら若手選手が経験を積み、さらに攻撃力を増し、ブッフバルト監督の目指す攻撃サッカーは一層脅威となるはずだ。

勝点9差で2位のジェフユナイテッド市原、10差3位のガンバ大阪は健闘といえよう。市原は、オシム監督の好い配分で選手が試合終了まで精力的に動き回った。G大阪は、日本人選手として最多の20得点をあげた大黒将志を中心に速い攻撃で最後まで食らい続けた。た

だ両チームとも、リーグを制覇するには総合力でもう一回り大きくなる必要がありそうだ。

1stステージ優勝の横浜F・マリノスは6勝5分け4敗で6位に終わった。けがに悩まされ続け、シーズンを通して万全の状態ではなかった。鹿島アントラーズは4位と古豪の意地を見せたが、ジュビロ磐田は3勝しかできず(5分け7敗)13位と惨敗した。監督の途中交代、若手への移行

期など課題もあるが、アテネ五輪代表監督の山本昌邦監督を迎えて来シーズンへの巻き返しが注目される。

新加入のアルビレックス新潟の頑張りにはたえられる。反町康治監督の指導で外国籍選手をうまく使いこなし、失点こそ33とやや多かったが、31得点をマークして攻撃力のあるところを見せた。新潟県中越地震にもめげず、地元の



© J.LEAGUE PHOTOS

声援にさらなる躍進を期待したい。

来季からは18チームに数が増え、1シーズン制に変わる。戦い方にも変化が出てようが、早くも開幕が楽しみだ。



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS

■ J1年間得点ランキング上位

順位	選手	所属	得点
1	エメルソン	浦和	27
2	大黒将志	G大阪	20
3	マルケス	名古屋	17
3	播戸竜二	神戸	17
5	グラウ	磐田	16
6	エジミウソン	新潟	15
6	大久保嘉人	C大阪	15
8	マルキーニョス	市原	12
8	安貞桓	横浜 FM	12
10	ルーカス	F東京	11
10	マグノ アウベス	大分	11

■ J1 2ndステージ順位

順位	チーム	勝点	勝	分	敗	得点	失点	得失差
1	浦和レッズ	37	12	1	2	40	15	25
2	ジェフユナイテッド市原	28	8	4	3	27	22	5
3	ガンバ大阪	27	8	3	4	38	25	13
4	鹿島アントラーズ	24	7	3	5	23	17	6
5	名古屋グランパスエイト	24	7	3	5	25	21	4
6	横浜 F・マリノス	23	6	5	4	21	17	4
7	アルビレックス新潟	23	7	2	6	31	33	-2
8	ヴィッセル神戸	21	6	3	6	29	30	-1
9	東京ヴェルディ1969	20	6	2	7	22	23	-1
10	FC東京	18	4	6	5	21	22	-1
11	サンフレッチェ広島	16	3	7	5	21	23	-2
12	セレッソ大阪	16	4	4	7	25	34	-9
13	ジュビロ磐田	14	3	5	7	23	28	-5
14	清水エスパルス	13	4	1	10	17	26	-9
15	柏レイソル	13	2	7	6	15	27	-12
16	大分トリニータ	13	3	4	8	14	29	-15



© J.LEAGUE PHOTOS

圧倒的な強さを見せた川崎フロンターレ

J2 2004年シーズン

独走という言葉がふさわしい、川崎フロンターレの2004J2（Jリーグ ディビジョン2）優勝だった。数字や記録も、彼らの圧倒的な強さを裏づけている。

第2節で早くも首位に立った彼らは、最終節までついにその座を譲ることはなかった。2位のチームに対する勝点差を見ても、第1クール終了時が湘南ベルマーレに7、第2クール終了時が大宮アルディージャに22、第3クール終了時が同じく大宮に27。混戦となった2位以下にとって、川崎の背中はずかしくばかりだった。

そして、プレッシャーによる足踏みを体験しながらも、第36節にはJ1への昇格条件の一つである2位以内を確定。続く第37節には、1999年以来2度目の優勝達成。いずれもJ2の最速記録を更新した。そして、最終的な勝点を105、得点を104と伸ばし、これま

での最多記録も塗り替えた。

こうした戦いぶりには、わずかに勝点1の差で昇格を逃した昨季の経験が、十分に生かされたといえるだろう。今季から指揮をとった関塚隆監督は「MIND 1」のスローガンを掲げ、1勝、勝点1、得点1にこだわる姿勢をチームに浸透させた。FWの我那覇和樹も「甘えがなくなった」と、その成果を語る。さらに、昨季はJ2得点王としてアルビレックス新潟のJ1昇格に大きな役割を果たしたマルクス、鹿島アントラーズからは元日本代表の相馬直樹など、補強も効果があった。



© J.LEAGUE PHOTOS

混戦の2位争いから抜け出した大宮アルディージャ

川崎の優勝決定後、焦点はもう一つの自動昇格枠である2位と、J1の年間最下位との入れ替え戦に出場できる3位の争いに移った。

これは予断を許さぬ戦いだった。シーズンも終盤にさしかかろうという第32節の段階で、2位の大宮から7位のベガルタ仙台まで、勝点4差の中に6チームがひしめく接戦だったからだ（3位モンテディオ山形、4位京都パープルサンガ、5位ヴァンフォーレ甲府、6位アビスパ福岡）。

この「2位集団」から抜け出したのは大宮。第32節から11連勝の快進撃を演じ、第42節で2位を決めた。安定した守備に加え、5月に



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS

■ J2得点ランキング上位

順位	選手	所属	得点
1	ジュニーニョ	川崎	37
2	大島秀夫	山形	22
2	我那覇和樹	川崎	22
4	佐藤寿人	仙台	20
4	崔龍洙	京都	20
6	マルクス	川崎	18
7	バレー	大宮	15
8	パロン	甲府（現・鹿島）	14
9	森田浩史	大宮	10
9	柿本倫明	湘南	10

■ J2順位

順位	チーム	勝点	勝	分	敗	得点	失点	得失点差
1	川崎フロンターレ	105	34	3	7	104	38	66
2	大宮アルディージャ	87	26	9	9	63	38	25
3	アビスパ福岡	76	23	7	14	56	41	15
4	モンテディオ山形	71	19	14	11	58	51	7
5	京都パープルサンガ	69	19	12	13	65	53	12
6	ベガルタ仙台	59	15	14	15	62	66	-4
7	ヴァンフォーレ甲府	58	15	13	16	51	46	5
8	横浜FC	52	10	22	12	42	50	-8
9	水戸ホーリーホック	37	6	19	19	33	60	-27
10	湘南ベルマーレ	36	7	15	22	39	64	-25
11	サガン鳥栖	35	8	11	25	32	66	-34
12	コンサドーレ札幌	30	5	15	24	30	62	-32

は昨季まで清水エスパルスでプレーしていたトゥット、7月には新潟から森田浩史というストライカーの補強が、ラストスパートにものを言った。

3位争いは最終節にもつれ込み、福岡と山形の直接対決で決着がついた。福岡はアウェイながら、勝点2差の余裕を生かし3-0と快勝。今季、先制した試合は20勝1分け1敗と無類の強さを発揮した。

盛り上がったJ2

横浜FC、水戸ホーリーホック、湘南ベルマーレ、サガン鳥栖、コンサドーレ札幌という8位以下のチームも、上位チームから勝利をもち取るなど、リーグを盛り上げた。今季の総観客動員は、190万4172人。昨季の208万4185人に比べれば減少だが、66万7447人を動員した新潟がJ1に昇格した後という点を考慮すれば、悪い数字ではない。実際、昨季より観

客数が上向いたのが、8クラブもあった。

来季は、JFLから昇格する2チームを加え、北海道、本州、九州、そして四国と、文字通りの全国展開となる。J1から降格した京都、仙台が1年で復帰を果たせなかったように、J2のレベルは高く、44試合の長丁場を乗り切る身体的、精神的な強さが要求される。こうした厳しい戦いが、サポーターの熱い声援を受けながらリーグを活性化し、ますます日本サッカーのレベルアップに貢献することが期待される。

柏レイソルがJ1残留決める 入れ替え戦でアビスパ福岡に連勝

残留か、昇格か。J1の年間順位16位の柏レイソルとJ2の3位となったアビスパ福岡が対戦するホームアンドアウェイ方式の入れ替え戦は、第1戦(12月4日)、第2戦(同12日)ともに2-0の勝利を収めた柏がJ1残留を決めた。

東平尾公園博多の森球技場において行われた第1戦で、柏は幸運な得点によって優位に立った。47分、左サイドから大野敏隆のけたボールが相手DFの足に当たってコースを変え、GKの頭上を越えるゴール。さらに、ロスタイムには相手のボールを奪ってからのすばや

い攻めにより、玉田圭司のパスを谷澤達也が決めて、貴重な追加点を奪った。

この時点で福岡は、「次の(試合)、先に1点を取れば変わる」(松田浩監督)と望みを失っていなかったが、日立柏サッカー場での第2戦も柏が先制した。柏の早野宏史監督が「前半を0-0で終えることができ、いけるという雰囲気になった」と言うとおり、57分に玉田のヒールパスを受けた宇野沢祐次の得点でリード。その4分後には、波戸康広のヘディングゴールが生まれ、2試合合計で決定的な4点差と残

留を揺るぎないものとした。

2001年以降のJ1を目指した福岡は、松田監督が「上(J1)に行くには、まだ足りないものがある」と振り返り、来季の再チャレンジを目指す。



徳島ヴォルティスとザスパ草津が新加入

J2 2005年シーズン

来季から新たにJ2へ参加する2チームも決まった。今季のJFL(日本フットボールリーグ)で2連覇を飾った大塚製薬からチームを引き継ぐ徳島ヴォルティスと、同3位のザスパ草津だ。徳島は四国で初のJクラブとなる。

JFL後期第13節で連覇を決めた大塚製薬は、1955年にチームが誕生した。1990年から92年はJSL(日本サッカーリーグ)2部に所属している。Jリーグ発足後は企業チームとして、アマチュアの最高峰であるJFLで戦ってきた。



J2昇格を祝ってお湯をかけ合う
ザスパ草津の小島伸幸選手(中央)ら

今回のJリーグ加盟の動きは、2003年5月の徳島県知事選挙がきっかけ。飯泉嘉門候補(当時、現知事)が「四国初のJリーグチームの実現」をマニフェストに盛り込んだことによるものだ。チーム名の「ヴォルティス(VORTIS)」は、鳴門海峡の渦潮になみ、ボルトガル語のvortice(渦)から取った。

一方、草津は3位でシーズンを終え、Jリーグ昇格条件の一つである2位以内はクリアできなかった。しかし、同2位のHonda FCがJリーグへの加盟を申請していなかったこともあり、12月6日のJリーグ臨時理事会で承認された。

草津の前身は1995年に生まれたが、2002年4月にJリーグ入りを目標に、現在の名称で再出発。草津温泉の旅館協同組合などの協力を仰ぎ、選手たちは地元の旅館、ホテル、商店などで働きながら試合や練習を行うことでも知られるようになった。今季がJFL初参戦。「ザスパ(Thespa)」は、英語のspa(温泉)による。



◎徳島ヴォルティス

法人名 徳島ヴォルティス株式会社
代表取締役社長 高本浩司
所在地 〒771-0134 徳島市川内町平石住吉225-34
ホームタウン 鳴門市、徳島市、松茂町、板野町、北島町、藍住町、美馬町を中心とする徳島県全県
ホームスタジアム 徳島県鳴門総合運動公園陸上競技場

◎ザスパ草津

法人名 株式会社草津温泉フットボールクラブ
代表取締役社長 賢持宏昭
所在地 〒377-1711 群馬県吾妻郡草津町大字草津464-28 町営プール2階
ホームタウン 草津町、前橋市を中心とする群馬県全県
ホームスタジアム 群馬県立敷島公園陸上競技場